

連載

実験的教育論 [10]

学校で恋の手ほどきをしよう

まちだ そうほう

広島大学大学院教授 町田宗鳳

性教育以前になすべきことがある

おおよその教育者が毎日、多感な若者を相手にしているながら、見ぬふりをしている人生の大問題がある。それが何かといえば、「男と女の問題」である。われわれは男であるか、女であるかのどちらかであるが、それにしても相手のことがよくわからないまま、生きている。だからこそ若者が異性について、まちがった認識をもってしまわないうちに、この人生の一大事について、できるだけオープンに語っておいたほうがよい。

「男と女の教育」といえば、すぐに性教育のことかと短絡的に考えてしまうのは、現代人特有の発想の乏しきである。このごろは小学校あたりでも性教育らしきものが始まっていると聞くが、その内容次第では逆効果となるだろう。知らないことを教えられれば、やってみたくなるのが、人間心理である。

女子中高校生の中に、うっかり妊娠する者が続出しているの、あらかじめ避妊の方法などについて知識をもたせたほうがよいという意見が出てくるのも、もったいな話である。しかし、コンドームの使い方などの「技術的な」話をする以前に、語るべき大事なことがあるので

はなかるうか。それは何か。

それは、男が女をどう見、女が男をどう見るかという、人間として最も基本的な問題である。それさえしつかり教育できれば、あとはすべての道徳の時間を省略してもよいぐらいである。道徳の時間が空いたぶん、好きなスポーツにでも興じさせるのがよい。

にもかかわらず、たいていの学校の先生は、女子生徒のスカートの長さを規制することが、道徳を正すことだという実に空しい発想しかもたない。

それにしても毎日の通学にミニスカートををはかないと格好が悪いと感じる女子生徒の未熟な美的感覚を培ったのは、誰なのだろうか。たぶん日本の悪質なメディアの影響が大きいが、真犯人はほかならぬ、日本社会の未熟さそのものである。

「男と女の教育」とは、一個の男性、一個の女性が敬意と愛情をもって互いに正視し合う関係を樹立するための教育のことである。異性が自分よりも上でも下でもなく、自分と同じだけの尊敬をもつ独立した人格であることを深く自覚するのなら、それはすでに全き倫理観を手に入れてしまったのも同然である。

しかし現実には、女性を一段下の存在に見たり、性的

対象としてしか見ていない男性があまりにも多い。女性は女性で、みずから意思決定をせず、男性に依存しているふりをしたほうが有利だと思ひ込んでいるふしがある。

産声を上げた赤ちゃんに、なんら性差別的な認識がなかったわけだから、幼児期のどこかで異性に対して間違った刷り込みがなされたわけである。それが家庭で起きたのか、学校で起きたのか、メディアを含む社会環境で起きたのか、専門家による精査がなされるべきだ。

もしも男性が、女性を自分とまったく同等の人格であるという明確な自覚を思春期からしっかりとっていれば、おおよそその家庭内暴力(DV)は回避できるはずである。幼女を対象とした醜い性犯罪も激減するはずである。

自分の人生がうまくいかないからといって、女性に八つ当たりする男性は、暴力的なぶんだけ、内面は脆弱な人格しかもち合わせない。挫折を成長のバネにせず、女性を隷属させることによって、そのプラスチックを発散させようとする男性は、新しい法律を作って、去勢するにかぎる。

いつまで倒錯した性文化に騙され続けるのか

日本文化は記紀の時代から、男神と女神が芳しきまぐわいをして、次々と国生みをしたことになっている。大和三輪山の祭神であるオオモノヌシなどは、若いヤセダラヒメに恋慕し、彼女が廁でしゃがんだ際に、丹塗りの矢に変身して、そのホトに突き刺さったと『古事記』に書かれている。こんな荒唐無稽な話が、国家が編纂した神話に堂々と記されているのは、「神国」日本ならではのことである。ことほどきように日本文化の中では、男女の営みについては、その産みの力を祝福こそすれ、忌まわしき罪悪行為とみなすことはなかったのである。

それにしても、男女の関係をなにか後ろめたきものであるかのように、必要以上に覆い隠す国民性があるのは、不自然である。おそらく武家文化が台頭してきて、少なくとも表面的には、圧倒的な男性原理で社会の歯車が稼動し始めてから、男女の睦みあいをおおっぴらに語れなくなったのかもしれない。

さらに江戸時代になって、「男女、席を同じうせず」という儒教思想が日本人の精神構造に徐々に浸透してから、教育的現場においては、男女が見えない壁で遮られ

るようになった。しかし人間の本能が容易に手なずけられるはずもなく、お上への当てつけのように、歌舞伎「曾根崎心中」などが爆発的人気を博することとなった。

明治以降、軍国主義の道突っ走るようになって、女間に自然に発生する恋愛感情が女々しきものとして不自然に抑圧され、反対に滅私奉公の殉国精神が雄々しきものとして賛嘆されるようになった。偏狭な国粹主義に目が眩んでしまったエリート軍人たちが、若き日に燃えるような恋にでも陥り、人の世に秘められた「もののはれ」を嘔みしめておれば、あのようにあまりにも愚かにして、無鉄砲な軍事行動に走ることもなかったのかもしれない。

第二次世界大戦後、アメリカ文化が洪水のように流れ込むと、今度はポルノグラフィが巷に横行するようになった。ご本家アメリカでは、実のところピューリタン精神が根強く残っており、ハリウッド映画に洗脳された日本人が想像するほどには、放縦な性習慣が存在するわけではない。

ところが世界広しといえども、日本ほど剥き出しのポルノグラフィが衆目に晒されている国はない。街に林立する看板も、毎週洪水のように発行される週刊誌も、

女性の裸だらけである。それが社会的害悪だと糾弾するほど、私は道徳家ではない。しかし問題は、商業化されたポルノグラフィが間違った異性観を助長していることである。

そのような皮相な性文化に日常的に触れている若い魂を守るためにも、早い時期からの「男と女の教育」は不可欠である。性的倒錯とは、同性愛やSMのことではなく、異性を一個の尊厳ある人格と認めることができない偏った精神構造のことである。そのような倒錯に陥る前に、親や教師は教育者としての責任を果たすべきであつて、コンドームの使用法やスカートの丈を論じている場合ではない。

真の意味で男女共同参画を

結論からいえば、男と女の仲を裂くような教育は間違っている。家庭でも学校でも、男女が仲良くすることに、後ろめたさを覚えさせてはならない。それよりも好きになった異性と、どのような関係を築いていけばよいのか、それをオープンに共に語れるような環境を提供するべきだ。不純異性交遊などという言葉は今どき死語となつていっているとよと思うが、恋する男女が問題な

のではなく、彼らを不純と見てしまう社会の目が問題なのである。

東京では夜遅く駅から自宅に向かう途中で、ビルの陰で逢引をする高校生カップルをしばしば目にしたが、彼らが非行少年少女というわけではなく、彼らにそのような状況でしか会えなくなつてしまつた社会環境が問題なのである。明るく自由な家庭に育つた若者が、そのような影のある交際をするだろうか。

「秘すれば花」と言われるように、恋愛はそれを取り囲む環境が困難であればあるほど、燃え上がる。だから恋に横槍を入れるような無粋なことをするよりも、彼らが恋愛に注ぎ込む爆発的エネルギーのほんの一部でも、勉強、スポーツ、創作活動に仕向けるように導いていくのが、親と教育者の責任ではなからうか。

恋愛の本質には、破壊と創造のエネルギーが同じだけある。運悪く破壊のエネルギーが出てしまうと、身を打ち崩すことになりかねない。恋慕の感情に耽溺して、人生を後ろ向きに歩み出すからだ。別れ話でも出てくると、愛情はたちまち憎悪に反転し、恋人を逆恨みして、刃傷沙汰を起こすことになる。

反対に恋愛が創造のエネルギーを生み出し始めると、

「精神一到何事か成らざらん」ということになる。恋愛を起爆剤として、豊かな感受性が育まれ、さまざまな才覚が芽生えてくる。

私のハーバード大学時代の指導教官の名を、ジョージ・ラップといった。彼は三十歳そこそこで神学部長に就任し、その激務をこなしていたが、当時、全米でも話題になったほど、その後の出世ぶりにはめざましいものがあった。

まずテキサスにあるライス大学学長に抜擢され、一流の教授陣を揃えたり、先進国サミットを主催したりして、二流とみなされていたライス大学を一躍、名門大学の一つに変身させてしまった。さらにその功績が認められて、天下のコロンビア大学学長として迎えられ、たちまち恒常的な赤字財政を黒字に転換した上で、大学の社会貢献度を高め、花道を飾って引退した。

そのような輝かしい経歴をもつラップ氏も、元はといえば、地方都市のペンキ屋の息子であった。彼には、いつも素敵な奥さんが寄り添っていたが、なんとラップ夫妻は高校時代から相思相愛の恋人同士だったのである。

その後、大学教師になった私が、ラップ家の二人の娘さんを指導する立場になったのも不思議なご縁であった

が、このエピソードは男と女が生み出すポジティブなエネルギーには、それほど計り知れないものがあるという一例として引用したまでである。

恋愛感情の破壊と創造の、いずれのスイッチを押すかは、当事者しか決められない。教育者の仕事は、スイッチの押し間違いをしないだけの判断力を子どもたちにもたせることであり、火のついた恋に水をかけることではない。

恋の手ほどき

男と女が愛し合うということは、必ずしも性行為に直行することを意味しない。個性の異なる二人の魂が、深いレベルで通じあうには時間がかかる。また自然な感情の流れで、性行為にたどり着くことになったとしても、それは刹那的な快楽を至上のものとするのではなく、愛情表現として相手の身体と心の動きに細心の注意を払い、時間をかけてじっくりとなさなくてはならない。愛情のこもったセックスが、男女双方にとって心理的に癒しの効果をもつだけでなく、健康や長寿に貢献することなどは、すでに科学的に証明されている。

そのようなきわめてシンプルな事実すら語る機会をも

たずに、コンドームの使い方やスカートの丈の長さにこだわる大人こそ、いったいどのような異性関係をもって生きてきたのか、と聞きたくなくなってくる。

これだけ性文化が巷に氾濫している反面、人間を動物の本能の世界に引き戻す性欲は、恥ずかしく、汚らわしきものという思い込みは、一般市民の潜在意識に深く入り込んでいいる。急増する夫婦間のセックスレスや深刻な少子化問題は、さまざまな要因が絡んでいるにしても、現代日本人が性に対する否定的な先入観を改めることによって、大幅に改善されるだろう。

恋愛は、男性にとっては内なる女性性(アニマ)を、女性にとっては内なる男性性(アニムス)を育てていく最良の機会となる。男性は恋することによって、相手女性への愛情を深めていくうちに、自らの野卑と横暴に反省を加え、繊細な感受性と他者に対する優しさを養うことができるだろう。また女性は、一個の男性と真剣に向かい合うことによって、みずからの内に自主性や決断力というものを培っていくことができる。

そのように男女ともに、生涯をかけて両性具有の人間へと円熟していかなくてはならない。それでこそ肉体を授かって、この世に生まれてきた甲斐があったというも

のである。いわゆる男女共同参画社会というのは、男女が限りなくユニセックス的存在になることではなく、男性は男性性を、女性は女性性を大切に成長させながら、両者で支え合う関係を構築しようとする社会のことであってほしい。

不当な男性優位構造は断固排除しなくてはならないことは言を待たないが、かといって、キャリア志向の女性が男性と競うあまり、母性を放棄するような社会が理想だとは思えない。能力ある女性がその才能を最大に伸ばしていけるように、教育者は誠心誠意応援しなくてはならないが、日本女性がまちがっても欧米社会にありがちな好戦的なフェミニズムに陥って、みずからを人生の袋小路に追いやることのないように助言をするべきだろう。

今回のエッセイに共感して下さった先生方がおられるなら、来週は全校で英語や数学の授業を休講にしていたら、臨時科目としての「男と女の教育」に振り替えてもらえないだろうか。生徒が机を叩いて喜ぶことは請け合いであるが、彼らのこれからの長い人生にとっても忘れ難い授業となるに違いない。